

## 目次

寄稿: 留学体験記 (緒方 健)	1-2	連載: (4) 適當のススメ (小野 雅裕)	5
わが街/専攻紹介: ノースカロライナ大学チャペルヒル校歴史学科 (山中 美潮)	3-4	海外大学院留学説明会のお知らせ	6

## 寄稿: 留学体験記

University of Cambridge  
緒方 健

### キッカケ

私の形の定まらない「グローバル」に対する興味は修士課程の際に参加させていただいたSt. Gallen Symposium<sup>1</sup>を通じより物質的かつ現実的なものへととなりました。そこでは、世界中から集まった若手リーダーや様々な分野のestablishedリーダーと直接接する中で、自身に足りない要素や、その距離感、必要な成長速度を痛感し、また目指すべき方向性が朧げではありますが形となりました。さらにSymposiumでの会食の際、幸運にも当時首相の内閣特別顧問をされていた方の隣に座らせていただき「出る杭」<sup>2</sup>や「他流試合」<sup>3</sup>の重要性に関するお言葉から国外に対する確信がさらに明確なものとなりました。その後、国内で修士号を取得し、研究内容・奨学金・留学期間の条件を深耕した上で英国ケンブリッジ大学先端ナノマテリアルグループへの博士留学を決めました。私は2012年3月に博士号を取得し、幸運にも翌月から同大学のリサーチフェローの職を得、現地のベンチャー企業などと共に、次世代蓄電池の開発を行っています。

### 究極のDiversity

英国の博士課程は日本と同じく3年コースで修士号が前提とされています(学科にもよりますが実際は平均3.5~4年程度かかるようです)。イギリスの学部は3年ですので博士課程には21歳から上は50歳くらいまでかなりの年齢層のばらつきがあります。ケンブリッジ大学の特色はやはり人間のdiversityです。学部レベルで30%の外国人比率、大学院以上ですと70%にも上ります(アメリカは30%程度)。

私のグループとその共同研究者は現在12人、9カ国から構成されています。そして、その国籍のdiversityは考え方のdiversityにも

反映されており、Commonwealth(旧イギリス植民地)諸国、大陸西ヨーロッパ、東アジア、アメリカ大陸出身者では政治的・哲学的・行動理念的な考えに大きな多様性が存在し、それはパブ飲みやフォーマルディナー(学期中に行われる晩餐会)における雑談でイギリス特有のIronyを介して浮き彫りになります。

### 「科学者」に対する社会的認識の違い

こちらの研究に関して、よく聞かれるのが日本との差異です。はじめに、「Scientistたるもの」に対する社会や人の情感・意識が大きく異なります。私は博士課程の一年目のレポートに対する口頭試問で指導教員に「Your title is not SEXY」という私にとっては青天の霹靂なコメントを頂きました。この社会(西EuropeとUK)はSir Isaac Newtonに始まり科学と産業革命を通じて長期間、近代社会を形成してきた「成功体験」を有しています。その中でScientistsやScienceは社会から一種の審美的敬意を持って享受され、top-celebrity同様(時にそれ以上)にSEXYな存在であるのです。次に研究に関して、インフラ面とスタイルに分けてお話しします。まずインフラ面に関して(しばしば日本の方々から驚かれるのですが)少なくとも私の分野周辺(物理・化学)では圧倒的に日本の国立大学のほうが強い研究インフラを持っているように感じます。これはアメリカの共同研究先や私の友人の声を思い返してみると、アメリカのトップスクールに対しても(宇宙・軍事など特定分野を除き)ある程度言えることだと思います。こちらでは自分たちが資金and/or労働力を持っていない分、「アイデアの高速研磨」と「分業制」で勝負しているように感じます。基本的に博士課程以上の研究者に与えられたフレキシビリティが高いので自由に動き研究を進めることができます。

1) <http://www.stgallen-symposium.org/>  
2) <http://www.kiyoshikurokawa.com/jp/2009/04/post-29c9.html>  
3) [http://kiyoshikurokawa.weblogs.jp/jp/files/JMA\\_Management.pdf](http://kiyoshikurokawa.weblogs.jp/jp/files/JMA_Management.pdf)

## 東大 vs. ケンブリッジ?

もう一つ日本の方々からよく受ける質問は「東大生とケンブリッジ大生はどちらが優秀ですか?」といった類の質問です。これに対して「優秀」という定義付けを、一般的に日本人の考える「優秀」というベクトル(答えのある問題に対する正解率やフェルミ推定のような地頭力)に加え、「リーダーシップ」、「ディスカッション能力」、「クリエイティビティー」、といった他の要素を付け加えて考える必要があるように感じます。そういった観点から判断いたしますと文頭の質問は東大生にとって若干分が悪くなるのではないかと、というのが正直な印象です。ただ、このような他の能力要素は社会的な背景と密接な関わりをもっていますので、いざ日本が初期キャリア段階からそれらが求められる社会構造や人事システムに変革すれば(もしくはそのような組織が多くなれば)、優秀な地頭を持つ日本人は急速に他要素のレベルを伸ばすことが出来るのではないかと考えています。

### 「プロフェッショナリズムの素晴らしさを風潮として享受できる社会の実現」

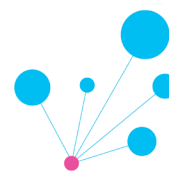
それに関連し、私の大好きな日本に渴望する点が一つあります。それは「プロフェッショナリズムの素晴らしさを風潮として享受できる社会の実現」です。政治・ビジネス・学術すべてに相当し、この中の第一線のプロフェッショナルこそが日本の英雄であり、彼らこそマスメディアや民衆に賞賛され荘厳たる敬意を払われる社会的な風潮が、一部の成熟した西ヨーロッパ諸国同様に日本には必要です。そして、これからの50年、日本の経済規模が相対的に衰退してゆく動かざる現実の中で、少なくとも国を動かしてゆくリーダー層は世界で戦える「個としての力」を養い、願わくば国内に「新しい産業を創る」新しい動きを意識してゆくことが最重要項目であることは明確であるように感じます。しかしながら、依然として巨大な経済圏である日本に属しているが故に、従来のキャリアパスの枠を超える行動の必要性を感じなかったり、物理的・情報量的に距離感のある世界に対して具体的な行動を起こせていない、非常に優秀な若者が多く存在することも事実です。そのよう背景を基に、(宣伝になり恐縮ですが)今年の始めにある組織を形成しました<sup>4</sup>。簡単に事業内容を申し上げますと、「日本の次を創る優秀な高校生」と「世界を舞台に挑戦している若手」を物理的またはオンラインで繋ぎ、第三機関による新しい教育体制を構築してゆく活動です。この組織は世界中のビジネス・政治・学術分野で活動する時代を切り開く大変優秀な若手日本人とそれを支えてくれる世界中に散らばる運営メンバー<sup>5</sup>から構成されています。活動詳細はConnect the Dots Japanのをご覧ください。また、活動に興味のある方はぜひ私までご連絡いただくと幸いです。

4) <http://www.ctd-japan.org/>

5) <http://www.ctd-japan.org/team.html>

高校生 × (世界人 + キッカケ)

= 明るい日本



## CONNECT THE DOTS

自分のやりたいことを世界から一つ選ぶのであれば、どこで何に挑戦したいですか?

Connect the Dotsでは、世界で活躍する若手日本人が高校へ向き1時間だけあなたの「ぼんやり」に「道」を提示しながらあなたの「可能性」を共に考えます。

それがあなたの世界への「キッカケ」と「勇気」を創ります。

高校生と世界で活躍する若手を繋ぎ、第三者による新しい教育体制構築を目指すConnect the Dots

## 最後に、留学を考えている方へ

月並みですが、学位留学(特にPhD)は時間とお金と労力を必要とし、非常に骨の折れるものであると同時にそこから得るものも非常に大きい経験です。留学において私的生活も非常に大きな意味を持ちますが、詰まる所「研究=ボスとの人間関係」が非常に大きな比重を占めます。私の場合幸い素晴らしい指導教員に恵まれましたが、人間関係で非常に悩まれるケースも多く存在します。ですので、進学を考えているラボがあるのであれば、その指導教員との接触のみならず、その教員のプロフェッショナルなスタイルを「ラボのメンバー」がどう捕らえているかを多面的に彼らにも聞いておくと非常に有意義な留學生活を送ることができると思います。皆様の実りある留學生活を心よりお祈りし、結びとさせていただきます。



### 緒方 健

東京大学工学部マテリアル工学科卒 (学部)  
JSPS特別研究員(DC1) & 同大学院中退  
英国ケンブリッジ大学博士課程卒 (PhD)  
同大学リサーチフェロー (JSPS海外特別研究員)  
Leader of Tomorrow, 37th and 42nd St. Gallen Symposium  
Connect the Dots Japan (Founder)

# わが街／専攻紹介： ノースカロライナ大学チャペルヒル校歴史学科

## わが街に関する紹介

私はノースカロライナ大学チャペルヒル校(UNC-CH)でアメリカ南部史を専攻しています。UNC-CHは1795年に初めて学部生を受け入れて以来、アメリカの州立大学の中でも最も古い大学の一つとして知られています。私にとって今回の留学は二回目。学部時代、交換留学でペンシルバニア州カーライルにあるディキンソン・カレッジで勉強して以来、再びアメリカに戻りアメリカ史を現地で勉強することは大きな目標でありました。京都大学での博士後期課程の途中、2011年にフルブライト奨学生としてこちらで学生生活を始め、今は二年次のカリキュラムをこなす日々です。

## チャペルヒル

UNC-CHがあるチャペルヒル市(Chapel Hill)は、18世紀後半に設立された、ノースカロライナ州中部にある小さく古い大学街です。東西に長い同州は東部の低地から段々標高が上がって西のテネシー州境となるアパラチア山脈に至りますが、チャペルヒルはちょうどその中間地点、名前が示す通り丘陵地帯にあります。住民はおよそ55,000人、そのほとんどは大学生・教員などの大学関係者で占められており、郊外の大学にはありがちですが、大学と街は切っても切りはなせない関係にあります。大学は教育施設としてだけでなく、プラネタリウム・コンサートホール・美術館などの施設を抱え、市民の社交の場としての役割も果たして居ます。キャンパスの北端はダウンタウンの目抜き通りであるフランクリン通と接しています。ここではレストランや喫茶店、土産物屋などが軒を並べ、いつも多くの人でにぎわっています。フットボールの試合があれば、街はスクールカラーであるカロライナブルーと言われる水色に染まります。田舎というのも手伝って比較的治安は良く、最低限のことに気をつけていれば(深夜一人で出歩かない、財布や携帯はカバンにきちんとしまっておく、など)怖い目にあうことは少ないでしょう。気候は東京や大阪といった日本の本州太平洋側の都市よ



カーボロにあるWeaver St. Market。  
住民の憩いの場になっている。

りほんの少し暖かく、四季がはっきりしています。春と秋には満開の花々や紅葉を楽しむことができます。またチャペルヒルは近年再開発が進んでおり、歴史的な町並みの中にもちらほらと現代的な建物が増えてきました。こうした街の安全や成長、温暖な気候、そして人口に対する博士号取得者の割合の多さなどから、チャペルヒルは2012年のCNN Money MagazineのBest Place to Liveランキングで10位になっています。

## カーボロとリサーチ・トライアングル

チャペルヒルの隣にはほぼ同じ規模のカーボロ(Carrboro)という街があります。実はチャペルヒルとカーボロでは学生間で住み分けがあり、学部生の多くが前者に住みナイトスポットもそこに集中しているのに対し、後者には大学院生が多く住んでいます。かくいう私はチャペルヒルに住んでいるのですが、毎週末行われる学部生達のパーティの騒々しさに、最近は引越そうかと少し考えています。カーボロは「ヒッピーのような」とよく形容されます。フォーク・カントリーミュージックや地産地消キャンペーンなどが盛んで、公式にLGBTQフレンドリーを謳っているような土地柄だからでしょうか。街の規模の割には多くの喫茶店があり、コーヒーを飲みながら勉強をしている大学院生を良く見かけます。また最近ではラテンアメリカ系移民が急増しており、彼らの文化・食生活なども街の一部となりつつあります。チャペルヒルとカーボロ、この2つの街のそれぞれの特徴がノースカロライナ大学での日々の暮らしの中で大きな刺激となっています。

チャペルヒルは近隣都市のダーラム(Durham)、州都ラーレー(Raleigh)と共にリサーチ・トライアングルという学術研究都市圏を構成しています。ダーラムにはデューク大学(Duke University)、ラーレーにはノースカロライナ州立大学(North Carolina State University)があります。ダーラムはかつてタバコ産業で栄えた都市で、煉瓦の倉庫街やタバコ工場の煙突が立ち並ぶ町並みに往年の面影を忍ぶことができます。ラーレーは州都としての行政機関の他、州立美術館・図書館などが集まっています。この三都市はバスで繋がっており、大学間でも様々な共同研究・作業が行われています。三大学の間では、学生は授業単位互換制度を利用して自由に講義を登録する事が可能です。各大学の図書館を利用することもできます。また大学院生は学位審査委員会に三大学のいずれかの大学教授を迎えることもできます。また歴史的黒人大学であるノースカロライナ・セントラル大学もダーラム市内にあり、積極的に交流がはかられています。

## 専攻紹介: 研究科の紹介

私の在籍する歴史学科は古代・中世史、アメリカ史、ラテンアメリカ史、女性・ジェンダー史、ヨーロッパ史、ロシア・東ヨーロッパ史、アジア史、アフリカ史、軍事史などに主専攻がわかれています。一学年二十人前後が在籍しており、上に挙げたような地域・時代・テーマ別の専攻分野に属しています。留学生の割合は毎年一、二人ほどです。留学生は出身地に関係した研究をすることが多く、私のように縁もゆかりもない外国史を専攻している人は稀なケースといえるでしょう。各専攻の中では更に細かく分野がわかれます。例えば、私の所属するアメリカ史では、外交・政治・移民史など様々な研究を行っている学生がいます。また分野・領域横断的な研究も盛んです。例えば、私の友人には20世紀のアメリカとキューバ外交史や、軍事史における女性などをテーマに研究をしている学生がいます。こういった学生のニーズに答えるため、またいわゆる「たこ壺的研究」に陥ってしまわないよう、学生は主分野における必須講義を受講する他、副専攻を選択しなくてはなりません。UNC-CHの歴史学科は、アメリカ南部史・キューバ史・ドイツ史・軍事史に特に力を入れています。中でもアメリカ南部史の分野では、南部各州の歴史史料のコレクションが充実しており、ウィルソン・ライブラリーという貴重書専門の図書館に保管されています。

## コースワーク

私は現在二年目で、コースワークの修了と修士論文執筆が課題として与えられています。コースワークをこなす学生は、通常一学期に週一回三時間の授業を三コマ取ります。一つは歴史学入門、論文作成法などの基礎コース、残りは主専攻・副専攻から一コマずつ授業を選択するのが一般的です。他の人文系分野同様、歴史学科はとにかく本をたくさん読むのが仕事です。一講義毎に、毎週一・二冊の本と二、三本の雑誌論文を読み、授業ではそれらについてディスカッションします。本から得た知識を話すというよりは、研究対象についてその本がどんな分析方法をとったのか、史料をどう読み取っているか、功績と問題点などを話し合うことが授業の核になります。読んだ本は批評を書き提出します。すると翌週先生のコメントと成績が返ってくるという仕組みです。学期末のファイナル・ペーパーは基本的にヒストリオグラフィーが課題として与えられます。それは自分の研究分野と授業の内容を重ね合わせながらテーマを一つ決め、それに関連する主要著作を選び、分析の視座、方法、結果などを検討し各研究者の歴史分析の主張を掘り下げる作業です。最終的に考察の中から次の課題を見つけます。例えばアメリカの独立革命をテーマにするとします。すると独立はイギリスと植民地側の政治思想の違いが一番にあったという学者もいれば、経済的な原因が一番だったという人もいます。こういった議論を時系列にまとめてどういう風に現在まで歴史が語られていったかを調べ、今後の課題を見つけます。

ところで最近では通常のコースワークに加え、人文学系の博士号取得者の就職率が伸び悩んでいる現実を受けて、歴史学科では新しい授業を開講しています。例えば、パブリック・ヒストリーの

授業では、史跡保存のメソッドや博物館学、記念碑の設立過程などを学びます。その他デジタル・アーカイブスの授業では、近年盛んに行われている歴史史料のデジタル化と一般公開化のプロジェクトに携わります。従来歴史学専攻の学生に一般的であった、博士課程修了→大学就職といったモデルに縛られないキャリアを目指せるよう、学生を指導するのが目的のようです。実際クラスメートに将来について訊ねてみると、大学教員を目指すという学生と別のキャリアパスを考えている答えた学生が半々ほどで、日本との文化の違いを感じています。



キャンパスにある南部連合兵士の像。  
撤去派と保存派で長く続く論争になっている

## 「南部」で行う南部研究

苦労もありますが、南部研究をする上でUNC-CHを選択したことは自分の中でベストな選択であったと思っています。UNC-CHは先にも述べたように歴史的史料を多数所有しています。研究者も多いので様々な学術交流が可能でアドバイスメも多方面から頂けます。キャンパス内には南北戦争や公民権運動の名残を見ることができ、郊外に出れば戦争跡地や記念館、プランテーションの跡地など歴史遺産にも恵まれています。奴隷制や戦争・人種問題で負の印象が強いアメリカ南部ですが、それを隠さずに記録しようとする試みは価値あるものだと思います。UNC-CHの地域史を尊重する姿勢は歴史がアメリカ人の生活や価値観にとっていかに大事かを伝えているような気がします。



山中 美潮  
ノースカロライナ大学チャペルヒル校  
歴史学科博士課程

連載: The Philosophy of a Bohemian  
(4) 適当のススメ

僕は適当人間だ。

たとえば、毎朝天気予報などいちいちチェックせず、今日は晴れると信じて家を出る。事実、大抵の場合、外を歩くときには晴れている。料理は材料を一切計量せず、おいしくなると信じて煮込む。事実、大抵の場合、それなりの物ができる。

もちろんいろいろと失敗もした。炊飯器を丸洗いしたら壊れた。指輪をしたまま温泉に浸かったら錆びた。パスポートと一緒に海に飛び込んだ。携帯電話とも一緒に海に飛び込んだ。ランニングの途中で銀行に寄るつもりで250ドルの小切手をポケットに入れて走ったら、風に飛んで紛失した。地図をポケットに突っ込んでサイクリングをしたら、やはり風に飛び、道に迷った。マクドナルドで支払いに使ったクレジットカードをトレイに載せたまままでいたら、ゴミと一緒に捨ててしまった。

そんなドジをする度に、子供の頃は母親、現在は妻に怒られ、あるいは呆れられるのだが、僕は調子よくこう言い訳する。脳が思考に使えるエネルギーには上限がある。人生の時間は限られているし、常にフル稼働も出来ないためだ。だから、細かいことに注意を払うエネルギーを節約すれば、もっと大きな事を考える時間を増やせるのだ、と。僕は脳のCPU使用率に余裕があるときは、新しい研究のアイデアを考えたり、小説のネタを思いついたり、米国大学院学生会のような活動の構想を練ったりしている。いろいろと失敗して損をしているが、長い目でみれば、このほうがイノベティブなでっかい仕事ができると思っている。(今、この原稿を覗いた妻が、鼻で笑って去って行った。)

ところで、アメリカは適当大国である。

たとえば、多くの都市の地下鉄やバスには時刻表が存在せず、運行間隔の調整すらしないから、20分待っても来ないと思ったら2本続けて来たりする。店ではお釣りが49セントのときはよく50セント返ってくるし、客も数セントのお釣りなら財布が重くなるだけと受け取らないことが多い。エスカレータはかなりの確率で故障して単なる階段と化している。注文したものが期日通りに届くことや、自動販売機からお釣りが正確に出てくることは期待しないほうがいい。とはいえ不都合があっても、ちゃんとクレームをつければ、殆どの場合は何とかなる。そして、こんなにいい加減な社会でもアメリカ人はピリピリせず悠長に生きている。彼ら自身も適当だからだ。アメリカ人は基本的に字が汚い。パーティーとデートの時以外は化粧をしない。食事前に手を洗わない。小雨なら傘をささない。

適当極まりないのは、アメリカに限った話ではない。海外を旅すると、程度の差こそあれ、どの国においても人は日本人よりはるかに適当に生きていることに気づく。そして、妻に鼻で笑われた僕の言い訳と同じロジックを社会のレベルに適用すれば、日本人は細

かすぎるせいで損をしていることが多々あるように思う。たとえば、日本人が掃除機に自動フィルター清掃機能を付けたり、ホコリを99.97%捕塵するハイテクフィルターを開発したりしている間に、ダイソンはそもそもフィルターの要らない掃除機を作り、iRobotはロボット掃除機を作ってしまった。日本人が携帯電話にチャットだのカラオケだの細々とした機能を詰め込むことに心血注いでいる間に、アップルは電話の概念を根底から覆す製品を作った。湯沸しポットからつゆが決してこぼれない構造を工夫したり、扇風機から1/fゆらぎやマイナスイオンを発射させるのも結構だが、食事前に手を洗わず雨でも傘をささない世界の大多数の適当人間たちが、そんな細かい機能に惹かれて電気製品を選ぶとは決して思えない。結局、日本人は細かいことに注意を払うためにエネルギーを使いすぎるあまり、大きなビジョンを描くことにCPU時間を割けていないのではないか。新人エンジニアたちのフレッシュな脳を、名刺を両手で渡す作法や電話対応時の正しい言葉遣いなどで煩わすあまり、クレイジーでイノベティブなアイデアを考える余裕を奪っているのではなからうか。

日本では多くの場面でキッチリすることを最優先にする価値観がある。しかしそれは決して世界共通の価値観ではないことを知って欲しい。多少いい加減でも全体の効率が上がればそれでいい、という考えもある。マイナス1とプラス2を足せばプラス1、という考えもあるのだ。

最後にいまひとつ、「適当」の効用を主張しよう。決断が楽になることだ。転職、留学、あるいは告白や結婚などリスクを伴う決断に面した時、真面目な人ほど、ああなったらどうしよう、こうなったらどうしようと思ひ、踏み切れず、機を逃す。心配の種なんて探せば無限にあるものだから、どこかでエイヤと心配を断ち切らなければ、決断なんて何も出来ないわけだ。適当な人は、そんな心配を「まあなんとかなるさ」の一言で片付け、勢いで決断することができる。僕が留学を決めた時もそうだった。僕はまた、付き合って半年の人に勢いでプロポーズし、その10日後に結婚した。そのお陰で、毎日のように何かしでかす僕を呆れつつも寛大に受け入れてくれる心優しい妻と、日々騒がしくも楽しい生活を送っている。



小野 雅裕  
マサチューセッツ工科大学航空宇宙工学博士課程修了  
慶應義塾大学 理工学部物理情報工学科 助教

## 告知：全国5大学で留学説明会を開催します

米国大学院学生会は、2012年冬に全国5大学で海外大学院留学説明会を行います。学位留学経験者による講演を通して、海外大学院への進学に関する手続き、学生生活、研究の進め方等について生の声が聞ける貴重な機会です。パネルディスカッションや懇親会も企画されており、学位留学経験者と直接話すこともできます。参加費はどの会場も無料です。事前参加登録、説明会の日程・場所、講演者に関する情報は、米国大学院学生会のHPへアクセスし各会場の詳細をご覧ください。<http://gakuiryugaku.net>

### 2012年冬、海外大学院留学説明会日程

- 12月10日(月) 18時～20時  
@早稲田大学 早稲田キャンパス 大隈記念講堂 小講堂
- 12月22日(金) 13時30分～17時  
@東京大学 本郷キャンパス 工学部2号館213教室
- 12月26日(月) 13時30分～16時  
@京都大学 吉田キャンパス 国際交流センターKUINEP講義室
- 12月26日(土) 16時30分～19時  
@慶応義塾大学 矢上キャンパス 創想館地下2階マルチメディアルーム
- 12月末(予定)  
@大阪大学 場所・時間随時発表

## 米国大学院学生会 <http://gakuiryugaku.net/>

### 【ニュースレター編集部】

原 健太郎 石原 圭祐 高野 陽平 大勝 裕子  
山田 亜紀 辻井 快

[newsletter@gakuiryugaku.net](mailto:newsletter@gakuiryugaku.net)

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。

<http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php>

## 編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 <http://www.facebook.com/gakuiryugaku> こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

日本大学院学生会ニュースレター班のメンバーとして記事の執筆を依頼するようになって三回目。最近、記事の依頼の意外なメリットに気付くようになりました。自分が今考えていることを依頼する記事のテーマとして設定することで、それに対する一つの答えが記事として返ってくるのです。答えとは考えるほどに洗練される反面、細部に捕らわれ枠を破れなくなるものです。記事集めは新たな「答え」に触れ枠を破る機会を私に与えてくれます。この記事集めの意外な副産物を嬉しく思いつつ、現在次号の執筆者に依頼する記

事のテーマを考えております。(辻井) ニュースレター班に所属して毎回思うのですが、それは日本人院生が多様な分野で活躍されているという事です。主に私は文系の院生の人達と連絡を取り合っているのですが、彼女彼女が学んでいる分野、大学院や所属しているプログラムは大きく異なり、私自身が毎回多くの事を学んでいます。今回記事を書いてくださった山中さんとは京都の若手アメリカ研究会で知り合い、今同じアメリカで共に学んでいます。ニュースレター読者の皆様に少しでもこれからの大学院応募に役

立つ情報を知っていただければ幸いです。(山田) カガクシャネットを通してアメリカ大学院の航空宇宙工学専攻に受験しようと思っっている方と連絡をしていました。先日、その方がミシガンに立ち寄った際に、数時間ほどお話したのですが、やはり日本で手に入る情報とアメリカで大学院生をして入る情報との格差を再度実感しました。米国大学院学生会では少しでも「生の情報」をお伝えしたいと思っています。引き続きニュースレターにご期待ください。(原)